

## 沖本幸子著『乱舞の中世 白拍子・乱拍子・猿楽』

小林直弥

平安時代の中心であった所謂宮中における貴族文化は、鎌倉時代以降、江戸時代末期に徳川慶喜が大政奉還により政権を天皇へ戻すまで、南北朝時代における建武の新政やその後も天皇制は変わらなかったものの、実質的には武家を中心とした政治体制であった。また、同時代新しい仏教宗派の発生や庶民文化の発展は、やがて「中世」というキーワードをもとに文化や芸能を豊かにさせた。その歴史的背景の中でとりわけ中世の時代を著者は「乱れる中世」(p1)と位置づけ、それまでの価値観や制度を崩壊させる象徴として、またそれを体現するものとして「乱舞」を主題として論を展開させている。「ランプともミダレマイとも」(p2)とまず読み方について述べた上で、乱舞は即興的な舞であり、中世前期には貴族も僧侶も武士もこぞって熱狂したとその時代を分析している。こうした乱舞性を伴う芸能には、他にも田楽躍りや風流も存在していたが、とりわけ猿楽及び能楽の前史における芸能として乱舞に焦点をしばっているのも本書の特徴と言えるだろう。

平安前期までの、所謂「今様」と呼ばれた流行歌や宮廷歌謡など、総体にメロディアスな歌や伴奏であった当時の歌謡に加え、平安後期に登場した白拍子や乱拍子は、実にリズムカルな乱舞を行う芸能として登場した。中世の人々は、新しく登場した「打楽器的な拍子、リズムを刻んで歌い舞うおもしろさに目覚めた」(p3)と著者は述べ、それは新しい時代への予感とも述べている。さらに、「乱拍子は乱舞の代名詞」(p4)と定義した上で、その動作、表現を「即興性と勇壮な足拍子を持ち味としながら、僧兵のような下級僧侶たちの延年の芸能として花開いていく。」(p4)と記し、特定の階層のみではなく、ありとあらゆる立場の者も一色単になって乱舞する中世という時代を読み解いている。また、著者は、乱舞を代表する白拍子も乱拍子も基本的には、現代においてはもはや滅びてしまった芸能と捉えた上で、乱舞における身体をひもとくことは、能以前の身体がどのようなもので、それがどう継承され、どうして逸脱して能が成立していったのか、中世における時代の身体性を明らかにするためにも乱舞の研究が必要であることも提起している。とりわけ本書では、平安時代後期から乱舞を通じて流行した芸能の歴史をたどり、その上で、宮廷楽舞や寺院での流行も加味し、白拍子・乱拍子の時代における享

受の方法、また乱舞が能における翁に与えた影響などを具体的な資料をあげ、白拍子や乱拍子など乱舞が果たした役割とはなんだったかについて考察している。特に、永長元年の松尾社の祭礼をはじめ、『洛陽田楽記』などの資料から当時熱狂した「永長の大田楽」事件ほか、それ以前の時代にはあり得なかった身分の異なる立場の者が一堂に会し、共に乱舞を含む田楽能に熱狂したエピソードも紹介している(p14-p16)他、今様の流行などを紹介する上にも『梁塵秘抄』など、他の参考資料においても、著者は古文に現代語訳を付すなど読者の理解を深める上にも丁寧かつ明細な説明が顕著である。さらに著者は、中世へと移行する平安後期からの時代を「乱舞の時代の幕開け」と定義した上で、平安末期からの戦乱につぐ戦乱の乱世に生きた後白河院の時代を「なんととってもこの時代のおもしろさは、貴族たちが流行歌を自ら歌い、楽しんだという点だ」(p19)と述べている。また、後白河院といえば、今様の愛好者であり、歌詞集『梁塵秘抄』や芸論集『梁塵秘抄口伝集』の編纂でも知られていることをあげた上で、後白河院が乙前という傀儡子を師匠として、自ら歌うことに明け暮れたことを紹介し、「戸を閉めたまま太陽が出たのも気がつかずに歌っていた」とか、「のどを三回こわし湯水も通らないくらい痛さだったが、それでも歌い続けてそのまま声を出すようになった」とか、「異常な執心で後白河院は今様を歌い続けていた」(p21-p22)ことなど、出典を丁寧に解説していきながら、その時代に対する現代人の固定概念を覆す驚くべきエピソードを紹介し、中世に生きた人々の芸能、とりわけ現在では消滅してしまった乱拍子や乱舞を伴う白拍子の芸など、後世の芸能へ繋がる一つの要因を乱舞であるとする展開は中世の芸能世界を理解する上にも重要な内容が際立って解説されている。また、著者はこうも記述している。「当時は、身分の高い人も低い人も今様を歌い出さない人はいなかった」(p22)ことを紹介し、永長の大田楽の記憶から、歌だけでは押さえきれないほどに人々の身体は躍動し、中世に至りついに白拍子、乱拍子の時代、乱舞の時代への扉が開かれたとも解説している。

さて、著者は乱舞の時代、言わば中世に関し、「乱」に象徴されるありとあらゆる階層の者、例えば殿上人や公卿、天皇や上皇、后や女院までも

が乱舞を鑑賞し、また乱舞に興じていたことを紹介しているほか、武士は酒宴のみならず戦場においてさえ乱舞に興じていたり、延年や風流に象徴される寺院の余興のみならず乱舞は下級僧侶たちの得意芸ともなっていくなど、著者の中世における芸能構造の視点が実に興味深く紹介されている。

さて、特に乱舞の芸の中でも、著者は白拍子という芸能にも注目している。例えば数少ない現存する白拍子の詞章の中で圧倒的な割合を占めているのが「物尽くし」であることにふれ、さまざまなものを列挙していく歌謡形式が乱舞の特徴であることも述べている。例えば、最大の特徴はその歌い方であるとし、著者は、「催馬楽や今様などの歌謡が「歌ふ」といわれていたのに対し、白拍子は歌うことは「かぞふ」といわれ、他の歌謡とは区別して捉えられていた」(p49)と説明した上で、「卓越した鼓とせめぎあうようにして足を踏み込み舞う芸能。それが白拍子舞の醍醐味だったのだ。」(p66)とも述べている。当時の芸能として乱舞が民衆にどのような評判であったか、また、人目を驚かし民衆の心を奪った乱舞の芸能の内、寺院を中心とした延年では、その装束から歌、仕草やそのパリエーションの豊かさが際立ち、衆徒たちによる様々な工夫はやがて競演の場となって新しい乱拍子舞を作り出していった経緯など、現代では東北地方の毛越寺など、一部民俗芸能のみで伝承されている延年当時の姿と乱舞との関係が知れる記述も興味深い。そうした常に民衆の心をつかみ中世という乱世とエネルギーの中で発展した乱舞の魅力は、現代に至り我が国の中世の舞台芸術を代表する能楽やその中でもとりわけ重要な芸として存在する「翁」と白拍子や乱拍子など乱舞を伴う芸の成立に深く関係している点も著者は指摘し、三番叟「揉の段」は「乱拍子」として伝承されていたことや、現在の能における三番叟のルーツには「乱拍子」があることなどをあげている。さらに、中世における白拍子舞の前半に動作が少ないことや、最後のセメ(乱拍子)では、鼓に合わせた足拍子など、著者は三番叟における父尉は白拍子舞の構造に類似し、必ず乱拍子で終わることを指摘した上で白拍子との起源的な繋がりについてもふれている。また著者は、八世紀に宮中にあった散楽戸の廃止から、やがて民間へ芸能が浸透していくきっかけを作った新猿楽、そして答弁猿楽と共に能楽の創世期に存在した乱舞(らっぶ)との関係性にも触れ、翁と白拍子、また乱拍子との関係、そして翁も乱舞の組曲とも言えるものであった可能性を示している点では、新しい発見を目指す研究書としての著者の意欲的な提起と受け取れる内容である。さらに、著者の論考は、能楽において重要な作品群である「道成寺」にも触れ、

そこに登場する「乱拍子」が乱舞の定義とは大きな相違がある点を指摘し、結論として白拍子舞の後半である「白拍子舞の後半、セメの部分の部分を極端にデフォルメして作られたもの」(p175)と解釈した上で、白拍子舞の後半部における和歌の歌いだしや、足拍子で大きく足を踏みながらしながら回ったとされる白拍子舞のセメとの関係性を分析している。

著者はこれまでの「乱舞」を通じた中世という時代、そしてそこで生きた人々を熱狂させた乱舞について論を展開させた上で、その視点からの宮中や寺院、そして時代そのもののイメージをも覆すことができる可能性について深く掘り下げて論考としてまとめている。とりわけ中世文化の一般的なイメージについても言及し、「幽玄」に代表される雅な一面とは正反対に、実際には、目まぐるしく変化し、戦乱に明け暮れた激動の時代にあつて、筆者は中世を「厳しくもエネルギー」な時代にあつて、そんな時代だからこそ、その力を凝縮させ反転させようとする力が働いた時代と読み解いている。我が国の歴史上、最も文化的にも芸能的にも、日本のオリジナル性が開花された時代。しかし、実際には乱れに乱れた世の中だからこそ、そこに集約され、それを乗り越える力を求めた結果こそ中世における乱舞に繋がったのではなかったかということも著者は述べたいのではないかと推察する。また著者は乱舞における中世的なイメージとして存在する熱狂性について、そこに「即興」という力点について注目し、その「瞬間的な力の凝縮は、能をはじめ、中世文化がもっとも得意としたところでもある。」(p180)と説いている。また、乱舞をはじめ足に纏わる芸能に関しては、とかく陰陽道の呪法など、宗教性が強調される場合が多い。しかし、著者はそれとは別に、中世に生きた人々が熱狂し乱舞するおもしろさと人間性の豊かな表現として存在する乱舞の魅力について、とりわけ白拍子と乱拍子の研究では十年以上の歳月を経て研究してきた中で、その再生が花開く可能性も述べている。確かに我が国の芸能史を紐解く中では、宮廷、そして神仏に関わる、さてまた陰陽道に関係する宗教性や儀式性を主たる要素として保有してきた歴史がある。しかし、本書においても述べられているように、実際にその時代に生きた人々の息吹を体現するかのよう存在するエネルギーこそ「乱舞」であり、それが伝統性の中で古典化され、型となって伝承されてきた時点で即興性をもった乱舞の魅力は失われていったのではないか。著者の論考を通し、もう一度我が国の芸能のあり方とその役割、その価値について再考するの必要性を感じる。本書はそんな貴重な一冊と言えるだろう。

(吉川弘文館、2016年3月刊行)